

2022年度

2月1日 午前
2科・4科 入試

国 語
(50分)

注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は□一から□二まで、16ページにわたって印刷してあります。
- 3 解答の下書きが必要なときは、この問題用紙の余白を利用しなさい。
- 4 解答用紙には、受験番号と氏名を書きなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に書き、解答用紙を提出しなさい。
- 6 句読点、記号は1字として数えなさい。
- 7 本文中には、問題作成のために省略や表現を変えたところがあります。

かえつ有明中学校

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

幸福とは、人間が人間として生きていることが、充実している状態ですね。生きる目的と言ってもいい。幸福であってほしいと、親が子どもに願います。夫が妻に、妻が夫に願います。幸福となることを期待します。社会全体に責任を持つている政治家は、人びとの幸福を実現しようとはかるでしょう。

幸福というのは、しかし、つかみどころがありません。ある人が言いました、不幸は X で、個別的なだけけれど、幸福は、^① 抽象的で、これが幸福だと言にくい、みたいなことを。

幸福の反対は、不幸です。たとえば、病気。たとえば、貧乏^{びんぼう}。それから、一家離散^{りさん}とか、敵にやつつけられるとか、不名誉^{ふめい}とか、恥辱^{ちじよく}とか、いろいろな打撃^{だげき}に打ちのめされて、とても幸福とは言えないという状態をイメージすることができます。けれども、幸福のほうは、^A 強^{ちが}いて言う^いと、不幸じゃないということになって、日々、幸せを実感していますなんていう人に、あんまり会ったことがありません。

でも、大部分の人びとは、それなりには幸福なんですね。

不幸になった人がよく言います、「不幸になってはじめて、幸福のありがたみがわかった」「ふり返ってみると、あのころは幸せだったなあ」幸福の真っ最中には、^② なかなか幸福だと実感できないらしいのです。(中略)

もう少し踏み込んで考えてみたいので、幸福について、こう考えたらどうかという、提案をいくつかしてみましよう。

まず、人間は、一人ひとり違う^{ちが}のですね。生まれつきの性質も違えば、生まれた場所や、時代や、状況^{じょうきょう}も違います。一人ひとり名前がついていて、個性的で、個別的で、同じ人間は世の中に一人としていないのです。兄弟だって、違^{ちが}う。双子^{ふたご}だって、違^{ちが}う。同級生だって、違^{ちが}う。似ているところがいくらあっても、必ず違^{ちが}う。

そうすると、あの人の幸せと、この人の幸せが同じかという^X な幸せのあり方は、きつとかなり違^{ちが}うはずです。ビールに枝豆があれば幸せだと感じるひともいるし、そうでもないひともいます。人間にはいろんな向き不向きもある

し、好き嫌いもあるし、個別的なのです。

I イチロー選手が、親の命令で、柔道をやらされたとします。野球がやりたかったのに。野球をやって、イチロー選手は世界有数の名選手となり、評価され、本人も活躍して、野球選手になってよかったなと思ってるだろうと思うんです。いろいろ大変だろうけれども、それでも、野球選手をやることは意味があると。でも、柔道の選手になったらどうでしょう。もちまへの運動神経と人一倍の努力で、ある程度のところまで行ったかもしれないけれど、世界一の柔道選手になったかどうか、疑問です。そして、本人が充実した柔道人生を送ったかどうか、もっと疑問です。

適性があると思える分野に、自分の選択で進んで、努力するかわりに、適性がなさそうな分野にしかたなく向かわされて、それを一生やらなきゃいけないなんて、あんまり嬉しくないですね。

さて、イチロー選手の場合、結果論かもしれないですけど、野球選手になって大変よかった。野球をやっていれば、幸せですね。じゃあ、イチロー選手じゃない、ほかのひとは何をやればよいのか。

これが、なかなか難しいです。どうして難しいかって言うと、うまくいって、うまくやれるかどうかは、やってみないとわからないからです。それから、それなりにうまくやれたとしても、社会が必要としている人数には限りがあるから、それを仕事にできるかどうか、よくわからないからです。

以下しばらく、仕事に話を限って、考えてみましょう。

ある仕事で、充実するという状態になるかどうか、よくわかりません。充実するというのは、本人がやっていて、やりがいがあること。嬉しいこと。向いていること。楽しいこと。それをまわりの人びとがみて、うん、彼はなかなかよくやっている、彼女はなかなかよくやっている、と評価を与える。報酬を与え、ちゃんと待遇する。この両方がそなわっているときに、それはいい状態なわけです。

さて、どれぐらいの人びとを、どういう活動に割り当てて、社会でそれを承認し、支えましょう、というふうになるかという、これは状況次第なんですね。(中略)

いま、自動車の運転手という仕事があつて、たぶん何百万人という人びとが日本中で、トラックやタクシーに乗って働いています。これは、どの車も人間が運転しないとイケないから、そうなっているのです。けれどもかりに、無人運転の技術が実用化すると、そのとたんに、日本中の運転手の人びとは失業してしまいます。どんなに運転に向いていて、好きで、やりたいと思つても、それを職業にするのはむずかしくなつてしまします。

仕事というのは、社会を支える B エウエキな活動であつて、ほかの人びとが必要なことをやつて、自分も向いていて思つて、収入も得られて、家族も支えられる。つまり、生活の基本です。その生活の基本である仕事は、幸福そのものではないけど、幸福の重要な土台になります。けれども、その土台が、こんなにあやふやで、けつこう頼りないものなのです。

どのような活動が、どれだけ社会に必要とされているのかは、時代によつて違います。学校の先生、公務員。会社の営業マン。それからエンジニアとか、自動車整備の人とか、とてもたくさん職業がありますが、これらも大なり小なり、③ あやふやな土台のうえに成り立つてゐるわけです。

最近の傾向は、製造業が、みな、海外に出て行つてしまつて、日本が空洞化し、非正規雇用のアルバイトみたいな職種ばかりになつてしまつて、給料が安いことです。 C ジュクレンできないし、昇進するとか、正社員に登用されるとかが、とてもむずかしい。生活もギリギリで、社会の評価も得られにくい仕事が増えていきます。これは、人びとの幸福感や充実感を、むしろ原因になつていきます。

しばらく前までは、いまがんばつていれば、一〇年後にはもうちよつとよくなるかもとか、希望があつたんですけど、社会が停滞してくると、そういう希望を持ちにくくなりました。(中略)

これはグローバル化や、経済の動向にも関連がありますから、 Y にどうこうなるものでもないし、これから先、さらに厳しくなつていくかもわかりません。こういう状況に個人の力で立ち向かおうと思つても、それはむずかしいことです。

もっとも、社会の流れに右に倣えをして、自分もそういう考え方に巻き込まれているので、一番大事な自分の価値や、いみをつかむことができなくて、幸福から遠ざかつてしまつてしまつていふこともあるかもしれません。それなら、自分の生き

方を見つめなおすだけで、充実を手に入れる道が開けるかもしれません。「1」

④ 幸福の原点に戻りましょう。幸福は、個別的なものです。私の幸福は、私の幸福で、ほかの誰かの幸福ではありません。ほかの誰かと比べることができない。比べるべきでもない。それは、私が自分の人生を、どう考えるかということに依存しています。「2」

比較できるもの。モノの値段は、比較をして、これが高い、これが安い、となっています。比較するのは、市場の性質ですから、これは仕方がない。けれども、本来、比較すべきでないものまで比較をしているのが、今の社会です。「3」

典型的なのは、学校の偏差値です。教育は、そのひとの可能性を引き出すものです。そのひとがもともとどこまでしかできなかつたのが、ここまでできるようになった。そのように能力を向上させて、価値を生み出すものです。そのひとの能力がいちばん伸びていく学校が、いちばんいい学校です。

Aさんにとつてのいい学校と、Bさんにとつてのいい学校は、同じ学校ではありません。Aさんがその学校で、充実した時間を過ごせて、幸福だと思うかどうかということ、Bさんがその学校でどう思うかということは、別のことです。

Ⅱ、今、やっているやり方は、学校を工場の生産ラインみたいに考えています。いつせいに授業を始めて、いつせいに授業を終わって、この範囲をよく勉強しておきなさい。いつせいに試験をして、細かな違いを数値にします。それをもとに進学先を指導したりしているわけですね。これは教育にとつて、必要でもないし、十分でもない。どうでもいいことをやっているのです。「4」

でも一度、こういうやり方を始めると、それが一人歩きしてしまう。その結果、教育が成立しなくなります。たとえば学校では、国語があつて、算数があつて、理科があつて、社会があります。国語はなぜありますか。国語は、生きるうえで必要で、そのひとつとして役に立ち、人生を充実させるから教えているのです。ほかの人より五点、いい成績が取れるとか、この漢字が読めなかつたから三点減点とか、そういうことで教えているわけではありません。国語そのものに意味があるんです。それは数値化できません。同じことで、算数にも意味があるんです。社会にも理科にも意味があるんです。その中身に触れて、それを喜びとすれば、それで必要かつ十分なんです。こういう教育の原点が、忘れられていますね。

教育は、人びとそれぞれの幸せを、支援しえんするためにあるのです。

これは、教育を例にして言っているんですけども、ほかの D リヨウイキでも同じだと思います。

どうも見ていると、日本で学校教育を受けると、子どもたちはだんだん元気がなくなっただけで、子どもはひとに依存して生きていますから、小さいあいだは、言われたことをして、あとは遊んでればいいんですけど、それがおとなになっていくと、社会の一員として、これからひとを支えていかなきゃいけない、という段階に来る。ひとをどうやって支え、自分でできることをやって、社会に役立ち、そして社会にも支えられて、自分が個人として生きていく、という自分なりの道をさぐることですね。でもそのころには、学校の価値観につぶされてしまって、そうしたことを前向きに考えるエネルギーが枯か渇かつしてしまっているように思います。

じゃあ、学校を出たあと、どういうふうな社会を支えて、どういうふうな社会に支えられるか。このことを、中学生とか高校生のあいだに、考えておくべきなんです。いちばんストレートには、職業になんを選ぶかですが、職業である必要はない。職業でなくたって、社会を支える。社会のためになる活動は、いっぱいあるのです。自分に向いていて、飽あきずに続けられるものは何か。自分で納得できるものは何か。それを具体的に考えていく。(中略)

社会は一人ひとりのことは考えず、大工さんが何人必要、お医者さんが何人必要、という大まかなところを、人数で決めることができるだけです。そこに、意味や価値を見いだしていくのは、一人ひとりであって、それこそ個別の問題です。その、意味や価値を見出す方法みいは、ほかのひとから習うことができませぬ。親も教えてくれませぬ。先生も教えてくれませぬ。自分で見つけるしかありません。そのことに責任をとれるのは、自分しかないからです。

(橋爪大三郎はしづめだいさぶろう『ふしぎな社会』より)

*枯渇：なくなること。

問一 ……部A～Dのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 ① 抽象的 と反対の意味の言葉が に入ります。文中から漢字三字でぬき出しなさい。

問三 ② なかなか幸福だと実感できないらしい と筆者が考える理由として、もつとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不幸はだれにでも訪れるが、幸福は不幸になった人でないと感じられないものだから。

イ 不幸は明確にイメージできるが、幸福はイメージしにくく、つかみどころがないから。

ウ 不幸はだれにとっても同じようなものであるが、幸福は一人ひとり違うものだから。

エ 不幸は現在進行形で感じるものだが、幸福は過去を振り返らないと気付かないものだから。

問四 文中の 、 にあてはまる語句として、もつとも適当なものをそれぞれ次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア または イ たとえば ウ だから

エ 次に オ ところが カ さらに

問五 ③ あやふやな土台 とは具体的にどのようなことですか。三十字以内で答えなさい。

問六 には次の四字熟語が入ります。空らんにあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

一
一

問七 次の文章は文中の「1」～「4」のどの部分に入りますか。数字を答えなさい。

マスメディアや、世の中の常識は、なにかと言うと、比較しようとしません。比較するとは、個別的じゃないということです。ほんとうは、比較できるもの、比較できないものがあるはずですよ。

問八 ④ 幸福の原点 とありますが、筆者は冒頭で「幸福とは、人間が人間として生きていることが、充実している状態」

と述べています。それを実現させるためにどのようなことが必要ですか。傍線よりあとの言葉を使って、八十字以内で答えなさい。

問九 文章の内容にあてはまるものとして、もつとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が自身の個性を発揮していることを実感し、その個性を他者からも評価されている状態が幸福である。
- イ 幸福とは言葉では定義しにくいものであるからこそ、幸福という言葉に見合う個性を成長させるべきである。
- ウ 向き不向きをしっかりと見分け、他者からの評価を気にせずに、やり通すことが幸福への最初の一步である。
- エ 幸福をつかむためには挫折は必ずすべきであって、挫折をしないと隠された力を見出すことはできない。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

五年生の一年間、一緒に飼育委員をやった。

小学校で飼っているウサギとニワトリの世話をするのだ。

ウサギは三羽、ニワトリも三羽いた。

飼育委員は毎年、なり手のない役だ。

毎日水替え餌やり、飼育小屋の掃除の仕事があるし、連休や夏休みといった長期の休みでも毎日のように、登校しなければならぬからだ。

わたしは、じゃんけんで負けて飼育委員を押し付けられた。生き物は好きで、家にも猫二匹と犬が一匹いるから世話自体はそんなに苦痛ではなかったけれど、これで、お休みが潰れちゃうなどと考えると少し憂鬱な気分にはなった。

五年生は二クラスしかなくて、飼育委員は各クラス一名ずつ。

わたしと光一くんだった。

最初、^① がっかりした。

X なんて言葉をまだ知らなかったけれど、本当に身体の力が抜けるような気がした。

飼育委員で、しかも相手が男の子なんて、最低、最悪だ。動物の世話を真面目にしてくれる男子なんているわけがない、と、わたしは思い込んでいたのだ。

光一くんも、じゃんけんかくじ引きで無理やり押し付けられた口だろう。きっと、すごくいいかげんで、無責任で、途中で仕事を放棄することだって十分に考えられる。

覚悟しなくちゃ。

わたしは覚悟した。

ウサギもニワトリも、世話をしてやる者がいなければ死んでしまう。殺すわけにはいかない。自分にアズけられた生命

を無視できるほど、わたしは凶太くはなかった。優しいわけではない。『わたしのせいで殺してしまった』なんて思いを引き摺りたくないのだ。凶太くないうえに、誰かに上手に責任転嫁できるほど器用でもなかったのだ。不器用で、生真面目で、融通がきかない。

Y 人だ、 Z 子だと言われていた。でも、しょうがない。これが、わたしだ。

不器用でも、生真面目でも、融通がきかなくても、わたしはわたしを生きるしかない。

わたしは、開き直ったように、でもどこか頑なに十一歳を生きていた。今でもまだ、そういうところはあられるけれど、思い込みの強い性質なのだ。

光一くんに会って、変わった。

光一くんが変えてくれた。

「円藤って、飄々としてるね」

ウサギ小屋の掃除をしながら光一くんに言われたことがある。飄々の意味がわからなかった。

糞を掃き集めていた手を止め、わたしは振り向く。光一くんがわたしを見上げていた。

目が合った。

柔らかな淡い眸だ。

光一くんと目を合わせたのは、このときが初めてだった。

「飄々って？」

わたしが尋ねる。光一くんが首を傾げる。

「うーん。大らかってことかなあ。あんまり、ごちゃごちゃこだわらない、みたいな……感じかな」

「そんなことないよ」

② 大声で否定していた。

自分で自分の声に驚いてしまった。

ウサギの糞の臭いが鼻孔に広がって、咳き込む。

ごほっ、ごほごほ。

「円藤、だいじょうぶか？」

「うん……だいじょうぶ。ちょっと……びっくりしただけ」

「びっくりするようなこと、言ったっけ？」

「言ったよ」

わたしは臭いにむせて、また、咳いていた。

光一くんが片手でわたしの背中を叩く。これにも、驚いた。もう五年生だ。男子と女子の距離が何となく開いていく時期だった。距離の取り方をみんな、手探りしている時期だった。

こんなにあっさりと背中を叩いてくれるなんて、叩けるなんて不思議だ。

「何を言ったかなあ」

背中を叩きながら、光一くんが呟く。妙にのんびりした口調だった。光一くんに合わせてるように、隣のニワトリ小屋で雄鶏のコースケがのんびりと鳴いた。

コケー、コケーツコー。

おかしい。

おかしくてたまらない。

噴き出してしまった。笑いが止まらない。

「えー、今度は笑うわけかあ。どうしたらいいんだろうなあ」

光一くんの一言に、わたしはさらに笑いを誘われる。

おかしい、おかしい。ほんと、おかしい。

③ 何て、おもしろい人だろう。

何て、ヘンテコで愉快な人だろう。

知らなかった。

下野原光一くんて、こんな人だったんだ。

笑いながら、わたしの心は、ほわりと軽くも温かくなって行く。

心地よかった。

光一くんは、飼育委員の仕事を怠けなかった。いかげんに済ますことも手を抜くこともしなかった。むしろ、わたしより熱心に取り組んでいた。

夏休みには、ちゃんと当番表をこしらえて、友だちや先生にも協力してもらって、毎日、登校しなくていいように工夫した。ニワトリ小屋に新しい餌場や水飲み場も作った（プラスチックの桶とペットボトルを組み合わせた簡単なものだったけれど、とでもりっぱに見えた）。学校近くの農家を回って、野菜の屑を分けてもらい餌に混ぜたりもした。野菜屑とはいえ新鮮で、ニワトリもウサギも餌箱に入れたとたん、ムチュウでついでに、かぶりついた。

光一くんが自分から飼育委員に立候補したと聞いたのは、水飲み場を作っている最中だった。ずっとやりたかったんだと光一くんは言った。

「五年生になったら、絶対立候補するって決めてたんだ」

飼育委員は五年生だけの役目だ。五年生しか、なれない。

「飼育委員の仕事……好きなの」

ペットボトルを光一くんに渡す。光一くんは、それを針金で作った輪っかに差し込み、水の出方を調べる。うなじを幾筋もの汗が伝っていた。

「動物、好きなんだ。犬でも猫でもウサギでも」

「ニワトリも？」

「あ……ニワトリのことは、あんまり考えてなかった。でも、コースケやコッコやクックはかわいい。飼育委員になってか

ら、ニワトリがかわいって思えるようになった」

わたしは嬉しかった。三羽の白色レグホーンのことをかわいいと言ってくれる人が傍そばにいることが嬉しかった。

④ 光一くんともっといろんな話がしたかった。でも、何をどう話したらいいのか見当がつかない。軽やかに、適当におしゃべりする技術をわたしは、ほとんど持ち合わせていなかった。

自分が歯痒はがゆい。痛いほど歯痒い。

「円藤も、動物好きだよな」

光一くんが顔を上げ、額の汗を拭う。わたしは、じゃんけんで負けて飼育委員を押し付けられただけ……とは言えなかった。

「あ、うん。家にも猫と犬がいるし……」

「ほんとに？ 猫も犬もいるわけ。すげえな」

「あつ、そんな。どっちも雑種だよ。犬は近所からもらってきたの。猫は二匹とも捨て猫。真っ白とミケ」

「えーっ、猫が二匹もいるんだ。すげえすげえ」

「だから、雑種なんだって」

「雑種でもすげえよ。いいなあ、猫と犬かあ」

「ペット、いないの？」

光一くんがうなずく。それから、小さく息を吐はき出した。

「妹が喘息ぜんそくぎみなんだ。動物の毛にすごい反応しちゃうから、家ではペット、飼えないんだよな」

「妹、いるんだ」

「うん、いる。一人ね」

「いくつ？」

「今年一年生になった。でも、けっこう、休むこと多いかな」

「そう……、じゃあ飼育委員とかできないね」

「うん、おれが飼育委員になったって言ったたら、いいなあってすごく羨ましがってた」

「何て、名前」

「あかり。平仮名であ、か、り」

「かわいい名前だね」

光一くんが動物を好きなこと、四つ違いのあかりちゃんをかわいがっていることを、わたしは知った。

飼育小屋の中で、わたしと光一くんはぼそぼそと、会話を交わした。その度に、わたしは光一くんのことを知っていく。わたしの中に光一くんが溜まってくる。積み重なってくる。

わたしは今でも、小学校の飼育小屋を鮮明に思い出すことができる。緑色の円錐形の屋根を、亀の甲羅 D……金網の目を、ウサギやニワトリの糞の臭いを、コースケの紅色の鶏冠を、ウサギたちの白い前歯を、光を浴びて輝いていたペットボトルの水を、ちゃんと思いつくことができるのだ。

コースケたち三羽のニワトリは、わたしたちが六年生になって間もなく、死んだ。新たに飼育委員になった五年生が、戸の鍵を閉め忘れてしまったのだ。戸を開けて、野良猫か野良犬か、あるいは裏山から狐が小屋に忍び込んだらしい。

ニワトリたちは無残に殺された。(中略) わたしがニワトリ小屋に駆け付けたとき、小屋には何もいなかった。血の跡と白い羽毛が地面に散っているだけだった。光一くんの作った水飲み場は壊れ、ペットボトルが斜めに傾いていた。

ア 何もないなかった。

イ からっぽだった。

「コースケ」

金網に指をかけて、呼んでみる。

糞の臭いはまだ残っているのに、コースケたちはいない。

ウ 消えてしまった。

「コッコとクツクを守ろうとして、戦ったんだよね」

消えてしまったコースケに話しかける。

目の奥が熱くなった。

わたしはわたしがコースケをとっても好きだったんだと気がついた。

いなくなつて、やつと気がついた。

コースケが好きだったんだ。

紅色の鶏冠を揺らして堂々と歩く姿も、年をとつて元気のなかつたクツクに寄り添つていた優しさも、止まり木に掴まり損ねてしよつちゅう落つちちていたお馬鹿な格好も、好きだった。

コースケ。

額を金網に押し付けて、泣いた。跡がはつきりと残るだろう。みつともない顔になるだろう。

かまいはしない。

泣くより他に何もできない。

「円藤……」

背後で名前を呼ばれた。

振り向かなかつた。

振り向かなくても、光一くんが立っているとわかつた。

⑤ 光一くんは、わたしの横に来て、わたしと同じように金網に指をかけた。そして、同じように目を凝らした。一生懸命に捜せば、どこからかコースケが現れると信じているみたいに、見詰めていた。

光一くんが何も言わないのがありがたかつた。

わたしは黙つて、立っていた。

光一くんも黙つて、立っていた。

（『短編少年』所収 あさのあつこ「下野原光一くんについて」より）

問一 ……部A～Dのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 ① がっかりした について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「がっかりした」と同じ意味の言葉が X に入ります。もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 後悔 イ 落胆らくたん ウ 悲惨ひさん エ 感嘆かんとん オ 狼狽ろうばい

(2) 「がっかりした」理由を四十字以内で答えなさい。

問三 Y ・ Z にあてはまる言葉の組み合わせとして、もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で

答えなさい。

- ア Y 憎たらしい Z 冷たい
イ Y 不器用な Z のんびりとした
ウ Y 付き合い難い Z 可愛げのない
エ Y 気が利かない Z さっぱりとした

問四 ② 大声で否定していた とありますが、それはなぜですか。もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今までに言われたことのない性格の一面を指摘されて驚いたから。
イ ひそかに思っていた自分の性格を言いあてられて戸惑ったから。
ウ のんびりしている光一くんからまさかの鋭い指摘をうけて意外だったから。
エ あまりにもかけ離れた自分の性格を指摘されて腹立たしかったから。

問五 何て、おもしろい人だろう。何て、ヘンテコで愉快な人だろう。と感じたときの「わたし」の気持ちとして、もつ

とも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア わたしの言葉に対して、光一くんの会話がちぐはぐであきれている気持ち。

イ 鶏の声もあいまって、光一くんの風変わりな言動に感心している気持ち。

ウ 他の友だちにはない光一くんの面白い発想を尊敬する気持ち。

エ 臨機応変に対応できる光一くんの会話のテンポに心地よく思う気持ち。

問六 ④ 光一くんもつといろんな話が出た。とありますが、「話が出たかった」のはなぜですか。もつとも適当な

ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 光一くんが動物好きで、話をしていると心地よく、飼育委員の仕事がどんどん楽しくなってきたから。

イ 協力してくれるかどうか不安だった気持ちが消えて、飼育委員の仕事を二人で相談したかったから。

ウ 光一くんも動物が好きだということがわかり、ほかの動物の話も光一くんから聞いてみたくなったから。

エ 飼育委員の仕事にも熱心で、様々な新しい面を発見するにつれて光一くんのことをもつと知りたくなったから。

問七 「わたし」にとって「光一くん」の存在が大きくなっていることがわかる^ひ比喩^ゆ表現をひとつづきの二文を探し、最初の十字をぬき出さない。

問八 ~~~~~部ア・イ・ウの表現は、「わたし」のどのような気持ちを表していますか。

問九 ⑤ 光一くんは（ ）目を凝らした。とありますが、ここから「わたし」が「光一くん」をどのような存在として感じているとわかりますか。四十字以内で答えなさい。

国語

解答用紙

※らんには何も記入しないこと

一

問一		問二		問五		問六		問八		問九	
A		B		C		D					
いて		問三		問四		I					
B		II									
C		D									
D											
A											
B											
C											
D											
A											
B											
C											
D											
A											
B											
C											
D											
A											
B											
C											
D											

二

問一		問二		問三		問四		問五		問六		問七		問八		問九	
A		(1)		(2)		A		B		C		D					
け		B		C		D											
A		B		C		D											
B		C		D													
C		D															
D																	
A																	
B																	
C																	
D																	
A																	
B																	
C																	
D																	

※

受験番号	氏名

※

※